第766号 平成21年3月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日　第三種郵便物認可

2009年（平成21年）
3月号（No. 766）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部　150円
URL●http://www.jac.or.jp
e-mail●jac-room@jac.or.jp

平成20年度第2回通常総会開催

吉永英明

総会であいさつする宮下会長

平成20年度の第2回総会が3月14日、東京・四谷のプラザエフで出席者104名、委任状出席者2807名を得て開催された。平成21年度事業計画（案）と収支予算（案）の審議が行なわれ、両案とも原案どおり承認された。

総会は定足数の確認のあと宮下秀樹会長が挨拶し、公益法人制度改革に当たっての対応、これに伴う定款改定の作業など、本会が早急に取り組まなければならない懸案の進捗状況を説明した。さらに宮下会長は「山の日」制定に向けたプロジェクトや「冬山天気予報」の拡充など、本会が登山界を主導する立場で推進してゆく新規事業についての展望を述べた。

このうち定款改定については、5月に開催される平成21年度第1回総会の案内に添えて改訂素案を示し、会員各位からご意見を聞くことになった。

このあと総会は、定款の定めにしたがって会長を議長として審議に入った。

平成21年度の事業計画（案）は、昨年の12月から施行されている公益法人制度改革をふまえ、前年度に引き続いて【公益目的事業】を前面に出した計画となっている。新規事業として特に《登山に関する文化・学術の振興事業》における「山の日プロジェクト」の推進、《事故防止事業》における「冬山天気予報」の拡充が掲げられている。全体としてみれば、全国28支部における多彩な活動計画が目を引き、なかでも《山岳環境保全事業》の多様化、活性化が著しい。今後は、支部化が望まれている首都圏における事業の推進が期待される。

一方、会員のための事業・サービスである【共益事業】もきわめて重要であり、恒例の「年次晩餐会」「全国支部懇談会」のほか年間を通じての山行、集会、講演会などが予定されている。現在の会員サービス水準を維持、向上させながら、いかにして公益法人改革に対応していくかが今後の課題といえよう。

平成21年度収支予算(案)は、やや緩やかになったとはいえ会員数の減少が見られる昨今の状況を考慮しつつ、より安定した財務運営を図るため、昨年同様「基礎的収支の均衡」を基本として編成され

（3ページに続く）

目　次

平成20年度第2回通常総会開催・・・ 1
平成21年度事業計画・・・・・・・・・・・・ 2
平成21年度収支予算書・・・・・・・・・・ 3
ローツェ南壁、秩父宮記念山岳賞を受賞・・ 4
AC名誉会員認証へ、ヨーロッパの旅(その1)・・ 5
映画『カラコルム』と『花嫁の峰チョゴリザ』を
　一般上映・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
韓国人登山者へ登山マナーの呼びかけ・・ 6
東西南北・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
　戦前の「日本女子登山会」
　『山日記』の復活を
　はじめてのヒマラヤ本
活動報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
　集会委員会／科学委員会
支部だより・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
　栃木・茨城・千葉支部／福岡支部
図書紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
会務報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
ルーム日誌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
会員異動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
図書受入報告・・・・・・・・・・・・・・・・・17
INFORMATION・・・・・・・・・・・・・・・ 18
山の博物館訪問・・・・・・・・・・・・・・・19
　東京都写真美術館

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月・火・木 ・・・・・・・・・・・・ 10～20時
水・金 ・・・・・・・・・・・・・・・ 13～20時
第2、第4土曜日 ・・・・・・・・・・ 閉室
第1、第3、第5土曜日 ・・・ 10～18時

６月	太平山山開き清掃登山ヘリーダー派遣（秋田）
６月～９月	高山植物盗掘防止事業（北海道）
６月・９月	白神山地ブナ林再生事業（青森）
７月	登山道の整備（福島）
７月中旬	高山植物盗掘防止パトロール（青森）
７月中旬	高山植物植生調査（継続事業）（山形）
９月５日	第８回山梨県富士山清掃活動（山梨）
９月上旬	自然観察会（茨城）
９月	富士山清掃（静岡）
10月中旬	九重山系標識等の設置･補修、木道点検･修理（東九州）
11月	講演会　自然保護（千葉）
10月31日~11月１日	森の勉強会（京都）
３月	英彦山の清掃登山（北九州）
４月･５月･８月	白山山系現況調査事業（石川）
通年	高尾の森づくり（自然保護）
〃	森林保全巡視活動（北九州）
〃	大山頂上の保護事業（山陰）
〃	猿投の森での調査活動（東海）

（６）国際交流事業

８月	日中韓学生交流登山（学生）
９月	第５回日韓交流山行（東九州）
２月	国際交流登山・ハイキング（海外）

（７）その他目的を達成するための事業

山岳遭難の予防と対策に関する関係団体との協議
国内関係団体（日本山岳協会、東京都山岳連盟、日本ネパール協会、日本ヒマラヤ協会、日本勤労者山岳連盟、日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト、日本山岳文化学会）との連携
海外登山団体との情報交換及び機関誌の交換等
国内博物館・美術館との提携
「上高地山岳研究所」の運用
登山記録等の保存・整備

２．共益事業（会員のための事業）

（１）登山、集会、施設の運用等

４月・10月	講演会　語り継ぐ日本山岳会の歴史（資料映像）
５月４日～10日	剱岳春山合宿（京都）
５月	雲取山・大菩薩嶺と三条の湯山行（集会）
５月	学生部所属大学山岳部新入部員歓迎会（学生）
６月６日～７日	新入会員のための徳本峠越えとウェストン祭（山研）
６月	第18回山を語る（図書）
７月	クライミング集会（学生）
８月12日	上高地山研集会（石川）
夏	支部設立50周年記念山行（秋田）
９月	第12回古道を歩く（図書）
９月	富士山（吉田口）山行（集会）
９月	５支部合同懇親山行（立山）（富山）
10月	第25回全国支部懇談会（リステル猪苗代）（福島）
10月	新入会員オリエンテーション（総務）
11月	第38回山岳史懇談会（図書）
11月	学生部所属大学山岳部マラソン大会（学生）
12月５日	平成21年度年次晩餐会（総務）
12月６日	晩餐会記念山行（集会）
１月	海外（ミャンマー・ビクトリア山）登山（集会）
２月６日～７日	合同懇談会と山行（茨城）
２月	アイスクライミング集会（学生）
３月	第27回図書交換会（図書）
３月	八ヶ岳（赤岳鉱泉ベース）山行（集会）
通年	インターネットホームページの運営（インターネット）
隔月発行	機関紙「木の目草の芽」の刊行（自然保護）

（２）海外登山等

第10次インドヒマラヤ登山隊（東海）
学生部ネパールヒマラヤ登山隊（学生）

（３）会議等

通常総会の開催（５月23日・平成22年３月）
理事会の開催（11回）
常務理事会の開催（11回）
支部長会議（５月・９月・12月）
支部事務局担当者会議の開催（２月）
評議員会の開催（随時）
同好会・同期会連絡会議（６月）

（社）日本山岳会　平成21年度事業計画（主な事業）

平成21年４月１日～平成22年３月31日

１．公益目的事業

（１）登山に関する文化・学術の振興事業

４月～11月	ミニ水力発電装置運用（山研）
４月～10月	藤島玄文庫分類整理・一般公開（越後）
５月	英文ジャーナル(Japanese Alpine News Vol.10)の発行
６月６日～７日	ウェストン祭（上高地）（信濃）
９月	『山岳』104年（2009年）の発行（山岳編集）
10月	第13回全国山岳博物館等連絡会議（資料映像）
12月	第11回秩父宮記念山岳賞
通年	会報『山』767号～778号の発行
〃	アラスカ・マッキンリー峰気象観測（科学）
〃	図書室の整備・研究（図書管理・図書）
〃	登山資料・山岳絵画の整備（資料映像）
〃	「山の日」プロジェクトの推進

（２）児童・青少年の育成事業

７月19日	青少年体験登山大会（東九州）
７月下旬	第10回自然児学校（北海道）
７月下旬	少年少女登山教室（青森）
８月８日～９日	白山親子登山（福井）
８月	子供登山教室（宮崎）
８月	福祉サポート登山（宮城）
夏	親子登山（北海道）
10月	第16回視覚障害者支援登山大会（東九州）
秋	親と子のふれあい登山教室（東海）
〃	知的障害児との登山（東海）
２月	イグルー作り（北海道）
年４回	家庭裁判所少年補導委託登山（宮崎）

（３）スポーツ及び登山に関する教育・啓蒙事業

５月	播隆祭・記念登山（高頭山）（富山）
５月30日～31日	白山開山泰澄祭（福井）
５月・９月	JAC会員と一緒に登ろう（山形）
５月～６月	講演会及び山岳映画会（千葉）
６月６日～７日	今西レリーフを守る会（京都）
６月14日	第２回登山教室（熊本）
７月11日	第５回山の博覧会（山梨）
７月25日	第52回高頭祭（越後）
７月	夏山登山の夕べ（栃木）
７月	海外登山報告会（海外）
９月下旬	藤木祭（関西）
10月17日～18日	第50回木暮祭（山梨）
10月	初心者登山教室（静岡）
11月	第24回宮崎ウェストン祭（宮崎）
11月	秋期講演会（栃木）
１月～12月	近畿分水嶺踏査（関西）
２月	海外登山助成金の交付
２月	シンポジウム「登山を楽しくする科学」（科学）
通年	登山講座（中国新聞社）（広島）
〃	NHK文化センター春期登山教室（東海）

（４）事故防止事業

７月	講演会　高齢者登山について（信濃）
10月	講習会「山岳遭難救助の実際」（指導）
12月13日	積雪期登山のセルフレスキュー研修会（岩手）
12月	救急救命講習会（京都）
12月～１月	登山者のための天気予報
12月～２月	雪崩研修（北海道）
12月～３月	大山冬山パトロール（山陰）
１月～３月	雪崩・雪上技術講習会（実地）（指導）
冬	アイスクライミング研修会（東海）
未定	講演会「山での道迷い」（医療）
未定	講演会「高所登山における突然死を考える」（医療）

（５）山岳環境保全事業

４月～11月	県民の森林づくり（岐阜）
４月～10月	真富士山山道整備（静岡）
５月	自然観察会（千葉）
５月～９月	山岳レインジャー活動（山梨）
６月14日	夜叉ヶ池を守るパトロール（福井）
６月20日～21日	自然保護全国集会（自然保護・秋田）

平成21年度収支予算書

平成21年４月１日から平成22年３月31日まで

科　目	平成21年度予算額	前年度予算額	増　減	備考
Ⅰ　事業活動収支の部				
１．事業活動収入				
基本財産運用収入				
基本財産利息収入	15,000	10,000	5,000	
会費・入会金収入				
入会金収入	2,200,000	2,200,000	0	
通常会費収入	59,300,000	61,000,000	−1,700,000	
終身会費収入	200,000	500,000	−300,000	
会費・入会金収入計	61,700,000	63,700,000	−2,000,000	
事業収入				
広告料収入	2,300,000	1,600,000	700,000	
印税収入	0	0	0	
刊行物売上収入	200,000	300,000	−100,000	
山研使用料収入	2,000,000	2,500,000	−500,000	
その他事業収入	2,000,000	2,000,000	0	
事業収入計	6,500,000	6,400,000	100,000	
補助金等収入				
補助金収入	1,500,000	1,500,000	0	
寄付金収入				
寄付金収入	0	0	0	
雑収入				
受取利息	320,000	300,000	20,000	
雑収入	1,300,000	1,200,000	100,000	
雑収入計	1,620,000	1,500,000	120,000	
事業活動収入計	71,335,000	73,110,000	−1,775,000	
２．事業活動支出				
事業費				
出版事業費	10,900,000	11,150,000	−250,000	
図書管理事業費	300,000	200,000	100,000	
調査研究事業費	1,700,000	2,800,000	−1,100,000	
指導研究事業費	430,000	490,000	−60,000	
支部事業費	11,000,000	10,000,000	1,000,000	
海外事業費	150,000	150,000	0	
山岳研究所事業費	1,820,000	1,580,000	240,000	
山岳研究所管理費	3,070,000	2,560,000	510,000	
ミニ水力発電運営費	150,000	150,000	0	
海外登山補助費	1,500,000	1,500,000	0	
その他事業費	9,000,000	9,300,000	−300,000	
印刷・製本費	500,000	500,000	0	
刊行物発送費	4,200,000	4,200,000	0	
事業費計	44,720,000	44,580,000	140,000	
管理費				
給料手当	12,000,000	12,000,000	0	
文具消耗品費	100,000	100,000	0	
印刷製本費	1,250,000	1,250,000	0	
旅費交通費	700,000	500,000	200,000	
通信運搬費	650,000	800,000	−150,000	
火災保険料	183,000	180,000	3,000	
修繕費	60,000	100,000	−40,000	
租税公課	580,000	650,000	−70,000	
光熱水道料	620,000	650,000	−30,000	
電話料	300,000	320,000	−20,000	
会議費	100,000	50,000	50,000	
什器備品費	300,000	100,000	200,000	
振替手数料	650,000	800,000	−150,000	
福利厚生費	1,600,000	2,000,000	−400,000	
事務所管理費	1,500,000	1,240,000	260,000	
その他管理費	1,800,000	1,800,000	0	
負担金	30,000	50,000	−20,000	
賃借料	3,240,000	3,240,000	0	
雑費	600,000	600,000	0	
管理費計	26,263,000	26,430,000	−167,000	
特定預金支出				
長期計画積立金支出	0	0	0	
秩父宮記念賞基金支出	0	0	0	
海外登山基金支出	0	0	0	
終身会費積立金支出	200,000	500,000	−300,000	
退職給与引当預金支出	100,000	0	100,000	
特定預金支出計	300,000	500,000	−200,000	
事業活動支出計	71,283,000	71,510,000	−227,000	
事業活動収支差額	52,000	1,600,000	−1,548,000	
Ⅱ　投資活動収支の部				
１．投資活動収入				
投資活動収入計	0	0	0	
２．投資活動支出				
投資活動支出計	0	0	0	
投資活動収支差額	0	0	0	
Ⅲ　財務活動収支の部				
１．財務活動収入				
財務活動収入計	0	0	0	
２．財務活動支出				
財務活動支出計	0	0	0	
財務活動収支差額	0	0	0	
Ⅳ　予備費支出	2,000,000	1,500,000	500,000	
当期収支差額	−1,948,000	100,000	−2,048,000	
繰越収支差額	7,165,283	7,065,283	100,000	
次期繰越収支差額	5,217,283	7,165,283	−1,948,000	

ている。21年度も一層の経費節減を目指す観点から、若干とはいえ管理費を前年度に比べて減額計上とし、事業費を増額したものとなっている。新規事業としての「山の日プロジェクト」の推進、「冬山天気予報」の拡充に対応するとともに、来年度は中国側が担当する「日・中・韓３国学生交流登山」などの若年層に対する助成も計上、また支部に対する21年度の助成も、いっそうの活性化を期待して、20年度と同様水準の支部事業費を計上している。

宮崎、吉永両常務理事の説明に関連して、二、三の質問、要望があったが、事業計画、予算案は全会一致で承認された。

熱心な審議を終了したあとは懇親会に移り、和やかな話し合いのひと時を過ごした。

平成21年度は本会創立から１０４年目の年である。会員の高齢化、会員の減少傾向という課題に取り組みながらも、新規事業を積極的に掲げ、先人たちが目指した登山界の主導的な役割を果たす飛躍の年にしたいものである。会員諸兄のご支援、ご協力を引き続きお願いしたい。

トピックス

ローツェ南壁、秩父宮記念山岳賞を受賞

田辺　治

このたびは日本山岳会東海支部冬季ローツェ南壁登山隊に、栄えある秩父宮記念山岳賞をいただき、誠にありがとうございました。

1999年の偵察から始まり、強風に追い返された2001年の試み、あと一歩のところで断念した03年の挑戦、そして3度目の正直となる06年、ついにローツェ南壁の冬季初完登に成功し、7年越しの夢を果たすことができました。

今回の受賞は一つの目標にこだわり続けた執念を評価して下さったと聞き、ありがたいことと感謝しております。またこの間毎回、日本山岳会の海外登山基金の助成をはじめ、日本山岳会の皆さまには物心ともに多大なご援助をいただき、ありがとうございました。

ローツェ南壁はメスナーやククチカ、プロフィといった世界の強豪が挑んでは敗れた、非常に困難な岩壁です。これまでにこの壁に挑んだ登山隊は20隊を超えますが、成功したのは1990年秋の旧ソ連隊のみです。同年春にはチェセンが単独アルパインスタイルで成功したと発表され、話題になりましたが、その後疑惑の登頂となってしまいました。

一方、標高8500メートル以上のヒマラヤ超高峰の冬季登山は、風、寒さ、低酸素、落石など挑戦者を悩ますありとあらゆる困難があります。この冬季にローツェ南壁をめざした7年間は、今思えばかけがえのない充実した時間だったといえるのですが、時には弱気になることもありました。「はたしてこの壁は登れるのか」「今度こそ死亡事故が起こるのではないか」、はたまた「冬にこの壁を登れるなんて考えるやつは、常識はずれか天才かだ」などと自問自答する毎日でした。それにもかかわらず続けることができたのは、尾上昇総隊長はじめ、隊員たちの助けと、東海支部員・支部友のサポートがあったからでした。あらためて感謝申し上げます。

年次晩餐会で言葉をかわす皇太子殿下と筆者（中央）

登山の経過につきましては『山』683、705、741号、『山岳』九七・九九・百二年に報告したとおりです。3度の挑戦において誰一人死ぬことなく、指一本失うことなく生還できたことは本当に幸運でした。ローツェの女神は私達に特別に優しくしてくれました。

08年12月6日の秩父宮記念山岳賞受賞講演には、皇太子殿下がご出席くださいました。引き続き開催された年次晩餐会では皇太子殿下の隣に座ってヒマラヤの話をすることになりました。殿下はヒマラヤに興味津々で、私の話を熱心にお聞きになりながら日本酒を召し上がっていらっしゃいましたが、同時にテーブルの方々に非常に気を遣っておられたのが印象的でした。私にとっては生涯に得がたい体験でしたが、殿下にとっても良い気分転換になったと思います。

さて、秩父宮記念山岳賞はこれまで研究論文などの文化的な業績が多く受賞されてきましたが、今回久々に登山行為を表彰していただきました。今後その流れが続くのであれば、世界の評価基準に合わせて、ぜひアルパインスタイルの登山を表彰していただきたいと思います。昨年の平出和也らのカメット南東壁や天野和明らによるカランカ北壁、馬目弘仁らのテンカンボチェ北壁、また成功はならなかったものの横山勝丘らのカンテガ北壁は、世界に誇る一級の登攀です。こういう登山を表彰することによって秩父宮記念山岳賞の価値はさらに高まることになりますし、彼らの今後の活躍の励みにもなります。

私としては極地法を駆使した大登山隊は今回のローツェが最後になるだろうと思っています。これからは時にスタイルにこだわりつつも背伸びをせず、私なりのヒマラヤ登山を続けていきたいと思います。

トラベル

AC名誉会員認証へ、ヨーロッパの旅（その1）

中村 保

2月のヨーロッパの旅はたいへん充実したものだった。英国アルパインクラブ名誉会員の認証と講演が主な目的だったが、ほかに4回の講演を行なった。存命のアルパインクラブの名誉会員は私を入れて28名である。皇太子殿下と同じカレッジのオクスフォード出身の副会長のマーチン・スコット氏が段取りをしてくれた。

滞在中はすべて友人登山家の家にお世話になり、心からのもてなしを受け、クラブ仲間のつきあいの楽しさ、素晴らしさを実感した。特にダグ・スコット夫妻が気を遣ってよく面倒をみてくれた。ダグ・スコット宅での夕食パーティには、クリス・ボニントン夫妻と『アルパイン・ジャーナル』編集長のスティーブ・ゴッドウィン氏も参加された。

2月10日、認証書を手にあいさつする筆者（右）

2月10日（ロンドン）、アルパインクラブにて新会長ポール・ブレイスウエイト氏から名誉会員の認証書授与ののち、「ヒマラヤの東――チベットのアルプスと神秘の河」と題して講演した。

マーチンが自分もビジネスマンであったためか、私が「キセル登山家」であることをユーモアを交えて紹介してくれ、ダグ・スコットが上手に締めくくってくれた。当日は80名以上が参加し、アルパインクラブ・ライブラリーの稀覯本の展示会も催された。

重鎮のジョージ・バンド、元UIAA会長のマクノート・デービス夫妻も顔を出した。新会長のポールは62歳、マンチェスターで高所作業を行なう会社を経営している。

アルパインクラブのメンバー数は約1300人で横ばい状態だが、高齢化には悩んでいる。平均年齢は50歳台半ばのようだ。

2月11日（ロンドン）、トラベラーズクラブにて講演。このクラブは1819年に創立、王立地理学協会（1830年創立）より古い。建物の内部は重厚そのもので、200年前にタイムスリップしたと思うほど。階段の手すり一つにも歴史が刻まれている。優雅なホールに50名ほど集まってくれた。

2月13～14日（ノッチンガム近郊メルボルン）、ノッチンガムでミック・ファウラー氏が出迎えてくれた。ミックの本業は税務官、年に1回だけ30日の休暇を利用して海外の山の登攀に出かける。

黄金のピッケル賞を受賞した四姑娘山（6250メートル）北壁の胸のすくような初登攀、念青唐古拉山東部の峻峰カジャチョ（6447メートル）、マナムチョ（6267メートル）の初登頂は、私の情報提供がきっかけだった。

夕食には近くに住む副会長であり、ミックのパートナーのクリス・ワット夫妻が来てくれた。ミックは今年の9月はパタゴニアへ、来年の秋には東南チベットの未踏峰ダムヨン（6324メートル）に挑む。

2月14～16日（北ウエールズ）、ここでは変わり者の登山家、ジュリアン・フリーマン・アトウッドと奥さん（大富豪ロスチャイルド家の娘）に会うのが楽しみだった。ジュリアンの活動範囲はヒマラヤ、チベット、南極圏と広い。自前のヨットをアルゼンチンにおいてあり、ティルマンが行方不明になる直前の航海では一緒にヨットで出かけている。現在はインド・チベット国境の未踏峰ツイ・カンリ（インド名・ネギカンサン）に執着している。850ヘクタールの大牧場を経営しており、広い谷と取りまく尾根筋まで自分の土地で大きな滝もある。乗馬用の馬3頭を、奥さんと娘さんが乗りまわしている。

近くに住む英国きっての山岳ジャーナリスト、リンゼイ・グルフィン氏が訪ねて来てくれた。リンゼイはアルパインクラブの役員、エベレスト基金の助成案件審査委員長を務めている

（4月号につづく）

カルチャー

映画『カラコルム』と『花嫁の峰チョゴリザ』を一般上映

平井一正

1955年、京都大学は木原均教授を隊長とする「京都大学カラコルム・ヒンズークシ学術探検隊」を派遣し、パキスタン、アフガニスタン、イランなど広範囲に学術調査を行なった。今西錦司を支隊長とするカラコルム支隊はバルトロ氷河を遡ってコンコルディアに達した。そのとき同行した日映新社、中村、林田カメラマン撮影による映画が『カラコルム』である。

ベースキャンプから望むチョゴリザ

それから3年後、1958年、いろいろな陣痛の苦しみを経て、京都大学学士山岳会は、桑原武夫を隊長とする登山隊をカラコルムのチョゴリザ（7654メートル）に派遣した。先年のアンナプルナⅡ峰登山の不成功のためにも、今度こそ成功しなければという期待に応えて、隊は初登頂に成功する。私は藤平正夫隊員とともに、この初登頂者となる栄に恵まれた。それだけに思い入れも深い。

そのとき日映新社から派遣された潮田カメラマン撮影による映画は『花嫁の峰チョゴリザ』として、1959年、半世紀前に一般公開され、『カラコルム』と同様文部省特選となり、多くの市民をはじめ中・高生が鑑賞した。映画は前年に遭難したヘルマン・ブールのテント発見のシーンや、500ミリ望遠レンズで登頂の一部始終をカメラが追いかけ、迫力ある映像や、また画面に流れる芥川也寸志の音楽が特に印象に残る。

このほどこの2つの映画の放映権を京都大学が買い取り、昨年秋に創設された、京都大学研究資源アーカイブの映像ステーションで一般公開されている。20人ほど入れる部屋で、大きな画面で見ることができる。上映は『カラコルム』が10時15分、13時10分、『チョゴリザ』が11時45分、14時35分（毎日上映、入館無料）である。

映像ステーションは、新設の京都大学稲森財団記念館にある。なおこの記念館内には、ほかに京都賞受賞者を紹介する部屋や今西錦司氏らによるアフリカ研究、東南アジア研究、考古学研究の成果をはじめ、西田幾太郎、湯川秀樹氏たちの足跡を辿るビデオなど14番組があり、それぞれ10分程度を選んで見ることができる個人閲覧用のブースもある。

開館時間は10時～16時、休館日は、日・月・祝日・京大創立記念日（6月18日）と年末年始。場所は、川端通り荒神橋東詰めで、京阪電車「神宮丸太町駅」5番出口北へ徒歩5分、または市バス河原町通「荒神口」下車東へ徒歩5分。問い合わせは京都市左京区吉田京都大学稲森財団記念館（TEL075-753-7741）へ。

トピックス

韓国人登山者へ登山マナーの呼びかけ

内野慎一・かおり

情報発信のきっかけ

私たちは韓国語登山情報HP「キルチャビ」を発信しています。キルチャビとは「みちしるべ」という意味。韓国留学経験があり、言葉や文化が分かるかおりと、PC担当の慎一との共同作業です。

上高地の山研で働くようになって、韓国人登山者の多さに驚き、現状を知りました。個人で来る人は韓国語情報の少なさに苦労しているようで、上高地や山で泊まれることを知らずに来た人にも会いました。韓国の登山ツアー客のな

かには経験や装備が不十分なまま大キレットを越える人もいて、「日本人には当たり前のこと」を知らず、山で困ったり、危険な目に遭っています。

一方、キャンプ場や山小屋からは「到着が遅い」「静かに休んでいる人がいても大きな声で話す」といった声を聞きました。言葉の問題だけでなく、文化や習慣、登山スタイルの違いなどが背景にあると気づきました。

日本では「早発ち早着き」が原則ですが、韓国では低山の日帰り登山が一般的で、遅くまで行動することも普通です。私たちが韓国の智異山を縦走中、「今日はのんびり」と昼過ぎに山小屋に入ったら逆に驚かれました。

また、静かに山を楽しみたい日本人が多いなか、仲間で楽しく飲み語らう韓国人は異質に映るかもしれません。でも、大らかで明るい気質の彼らにはよくある光景です。私たちは「韓国人の当たり前」も知るがゆえに同情する部分もあります。彼らが「非常識な登山者」と認識されるのは残念ですし、お互いの理解が深まれば摩擦はもっと減るのにと歯がゆく思いました。

韓国語HP「キルチャビ」発信へ

そこで、山研に入る前年（04年）に趣味で始めていた韓国語HPを情報発信の場として活用することにし、閉所後の冬の間に内容を見直しました。

さらに、山研の仕事の合間に、周辺の施設にハングルの張り紙や案内文を書いたり、意思疎通の助けになるような「単語集」を作って山小屋に配りました。また、6月の残雪、10月の降雪など、韓国人には想像もつかない日本の山の気候や、登山道状況を韓国のインターネット掲示板に投稿しました。

そのうち、HPを見た人からさまざまな質問のメールが届くようになり、「韓国人登山者が何を知りたいか」が分かりました。それをふまえてHPの内容も少しずつ修正し、現在は登山や山小屋でのマナー、交通、よくある質問など実用的な情報を主に掲載しています。

ほかに、松本の市民ボランティアによる観光HP「新まつもと物語」の韓国語ページ運営に参加したり、韓国の山岳誌『MOUNTAIN』に寄稿しています。

日本アルプスの夏山案内のページ

苦心したことや今後の取り組み

情報をただ翻訳すればよいわけではありません。例えば「雨具」と書けば、われわれは「ゴアテックス製の上下セパレート型雨具」を思い浮かべます。しかし韓国ではゴアテックスのジャケット、ポンチョ、薄いビニールカッパをも登山で使っています。それらは3000メートル級の縦走には不適切ですから、雨具の形状まで書き添えなければならないのです。「お花畑」を直訳した韓国語は花壇の意味。「ガレ場」とか「尾根」「天水」という独特の単語にも悩みました。

正しく分かりやすい内容にするために、登山に精通した韓国人を探し出し、その意見を大いに参考にしました。おかげで韓国内の検索サイトでも上位に出るようになりました。

手探りで始めたささやかな活動にもかかわらず、今回、会報に掲載していただけることになり嬉しく思います。これからも内容の充実を図ることに加え、エリアを拡げて各地の山を紹介し、日韓の登山者同士が交流するきっかけになる情報を発信したいと思っています。何か情報があれば、ご連絡いただければ幸いです。

URL http://www33.ocn.ne.jp/~tamayatsu/

✉ giljabi2005@yahoo.co.jp

西北 東南

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度でお願いします）

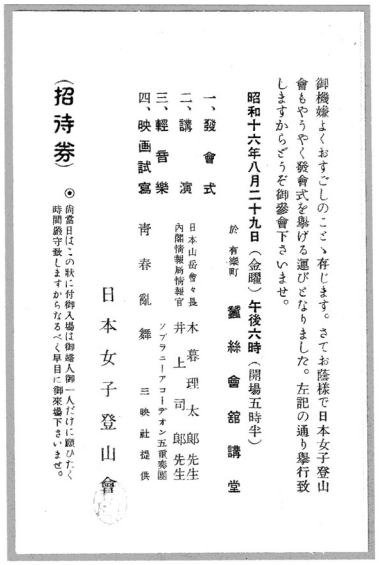
戦前の「日本女子登山会」

佐々木民秀

昨年の夏、趣味のエンタイア（『山』第757号10ページを参照）を整理中、またしても戦前の古い山岳関係の資料（郵便物）が見つかった。

宛先は、東京市本郷区根津須賀町七番地の田中甫史子様とあり、発信者として、東京市本郷区丸山福山町三番地（八清荘内）「日本女子登山会事務所」のスタンプが押されている。

封筒の中には、昭和16年8月29日午後6時から、有楽町の蠶絲会館講堂において開催する「日本女子登山会」の発会式をあげることを目的に、講演者には日本山岳会会長・木暮理太郎、内閣情報局情報官・井上司郎の両氏、アトラクションとして軽音楽や『青春乱舞』（三映社提供）の映画試写などを行なうことが書かれているハガキ状の招待券が1枚のみ入っていた（写真）。



御機嫌よくおすごしのこと、存じます。さてお蔭様で日本女子登山會もやうやく發會式を擧げる運びとなりました。左記の通り擧行致しますからどうぞ御參會下さいませ。

昭和十六年八月二十九日（金曜）午後六時（開場五時半）

於 有樂町 蠶絲會館講堂

一、發會式　日本山岳會々長 木暮理太郎先生
二、講演　内閣情報局情報官 井上司郎先生
三、輕音樂　ソプラニーアコーデオン五重奏團
四、映画試寫　青春亂舞　三映社提供

日本女子登山會

（招待券）

◉尚當日はこの狀に付御一人入場は御婦人御一人だけに願ひたく時間厳守致しますからなるべく早目に御來場下さいませ。

ハガキの裏面に「尚當日はこの狀に付御入場は御婦人だけに願ひたく時間厳守致しますからなるべく早目に御來場下さいませ」とある。

この「日本女子登山会」とは、一体どのような方々によって結成され、その後どうなったものなのか。遠く秋田の私にはなじみの薄いことではあるが、何となく気がかりとなり、後に本会の穴田雪江永年会員や、その道の識者に調べていただいたが手がかりはないらしく、ここに投稿した次第である。

この「日本女子登山会」の結成当時は、太平洋戦争勃発の3カ月ほど前の事であり、当時、国策として国民の健康増進を目的とした登山会が全国的に奨励されていたようである。そのためであったものか、それとも本来の登山活動を目指していたものだったかは不明であるが、結成後まもなくの戦争突入で自然消滅されたものかも知れない。いずれにせよ発会の準備がなされていた事は事実であり、女性登山史の一隅に加筆しておく必要はあるものと思う。

『山日記』の復活を

秦 和寿

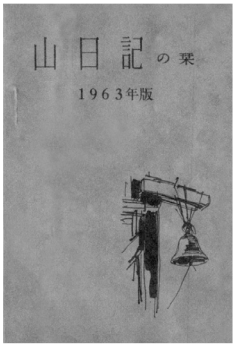
日本の最初の手帳は、明治7（1874）年の「警察手帳」と「軍隊手帳」が始まりである。その後各種の手帳が普及し、大正6年には需要が500万部あったという。識字国ならではの広まりだ。

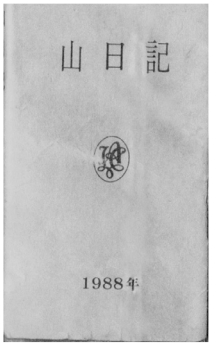
日本山岳会の『山日記』は昭和5（1930）年に第1号が発行されているが、巷間の流行のなかで生まれたように思われる。昭和30年代には、登山ブームとともに赤い表紙の『山日記』は憧れの的となった。当時の『山日記』は、日記欄のほかに登山に関する知の宝庫のような記載があり、生物群まで加えたハンディな百科事典的な内容となっている。『山日記』には説明の栞（別添）などもあり、当時の出版文化の隆盛がわかる。

浪漫的な要素はあったものの、手帳として記録するには厚すぎて実用的ではなかったし、後の編集者には、大きな負担となったのではないか。最後の53号は一般の手帳となんら変わりなく、日本山岳

会設立趣意書が載っているのみである。ついに平成元（1989）年で休刊となった。御茶の水の茗溪堂に行くと売れないことを嘆いていたが、この内容では山岳会の手帳を購入する意味がないと思った。

『山日記』が休刊となって、約20年が経った。『山日記』がなくなってからも、誰もが、山行の途中で記録やメモを記入していることだろう。そろそろ『山日記』を復活してもよいのではないか。準備段階として『山岳会メモ帳』的なものから始めるのがよいと思われるが、いかがであろうか。





赤い表紙が人気だった『山日記』

はじめてのヒマラヤ本

鈴木正規

私がはじめてヒマラヤの本を入手したのは、エルゾーグの『アンナプルナ　最初の8000メートル』であった。当時の週刊誌『週刊朝日』を購読していたが、その1953年1月号に、エルゾーグの談話が載っていた。彼の脇には今出版されたばかりの『アンナプルナ』が置いてあった。彼はそれを、山で受けた凍傷治療のため入院中に、時には涙を流しながら、書いたり、口述したりしたという。その談話は非常に感動的であった。

私はすぐその本を丸善に注文した。数カ月後、本がきた。紙装のあまり立派な本とは言えなかったが、私は数日間、何もかも放ったらかしにして、字引と首っ引きで読み耽った。それまでのヒマラヤ登山記、イギリス隊の事実に忠実で地味な記録や、ドイツ隊のいささか感傷的、観念的な報告に比べて、エルゾーグの文章は実に躍動的で、小説でも読むような面白さがあった。この本はその後すぐに日本でも翻訳されて、多数の読者を得たのも当然であった。

話は変わるが、東京の一誠堂の書棚ではじめてヒマラヤの本を目にしたのは、イギリスのエベレスト登山の記録であった。厚手のコットン紙を使い、豊富に写真の入った大型判で、背に金文字が捺してあり、手に取るだけで手が震えるような見事な本であった。

最初の遠征隊は1921年、続いて1922年、1924年、いずれも同じ体裁で報告書が出た。私が目にしたのは、そのうちどれであったかは覚えていない。当時、貧乏生活の私には高嶺の花であったから、見過ごすほかなかった。エベレスト報告書は、その後も同じ型で、1933年、1936年のものも出た。その5冊を自分の本箱に並べて悦に入ったのは、それから二十数年後のことである。

その後、ヒマラヤの本を買ったのは、バウエルの『ヒマラヤへの戦い』で、その頃は私も会社勤務をしており、いくらか懐に余裕ができた。この本には布装と紙装とがあったが、私は安い方を求めた。本のカンチェンジュンガの写真は私を夢中にさせた。

続いてベヒトールトの『ナンガ・パルバットのドイツ隊』（1934年）も私は逃さなかった。有名な大遭難の織り込まれた登山記で、感動の深い本であった。

エベレスト、カンチェンジュンガ、ナンガ・パルバット、この3つの遠征記録が断然光彩を放った。これらの本を持って私は定年を迎えた。ほかの山の本は手放しても、ヒマラヤの本だけは大事にしている。

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

集会委員会

栂池高原スキー懇親会

集会委員会が主催する懇親山行の一つに、2泊3日で催されるスキー懇親会がある。今年は1月10日から12日、栂池高原スキー場で、スキー滑走のほか、新しい試みとしてスノーシュー・トレックというメニューが加えられて行なわれた。

1日目（雪）、三々五々に集まった参加者36名は、夕食時に顔をそろえ懇親を深めた。その後、ホテルのオーナー赤沼健至氏によるアルペンホルンの演奏と、山小屋のオーナーとしての自然観、自然を守るための取り組み、努力などを、映像を写しながらお話しいただいた。示唆に富んだ事柄が多く、姿勢をただされる思いがした。

2日目（晴れ）、朝食後、玄関前に集合。記念撮影をした後、スキー講習組、勝手組（自由に滑走を楽しむ）、スノーシュー組と分かれ行動することになった。

スノーシュー組（10名）は、赤沼氏などガイド2名とゴンドラを利用し、栂池自然園を目指す。新雪のルート、トレースのあるルートと、巧みに誘導されて神の田圃に登った。この足下は湿原で、夏の時期には踏み込むことの出来ない場所である。さらに登り、最終目的地、栂池自然園に着く。

すでに12時を回っていたが、風を避けてランチタイムをとるため高度を下げて進む。ドーンとお腹に響く音を聞いた。どこかで雪崩が発生したのであろう。「雪崩の音よね」と前後の人と言葉を交わす。雪を踏み固め、周囲を掘り下げてにわかテーブルが完成。お弁当は、ボリュームたっぷりのサンドイッチ。ややしてホットワインが供され、冷えた体に心地よく広がってゆく。なんと、おいしかったことか。

次に用意されていたものが雪の滑り台。標高差6～7メートルもあろう壁の斜面を、ガイドのつけたトレース上をお尻で滑って降りろという。上手な人、下手な人、それぞれが雪まみれになって、その一瞬を楽しんだ。

夕食後、再び赤沼氏により、赤沼家の蔵から発見された古いフィルムを編集した『大正12年厳冬の立山、針ノ木越えと薬師、槍越え』（羽田栄治会員編集）を見せていただいた。草創期、山を目指した先達の、豪壮で力強く、気概に充ちあふれた姿勢と行動力を目にすることができた。深い感銘を受ける時間を過ごした。

ホテル前で参加者全員の記念撮影

3日目（曇り）、スキー組、スノーシュー組、自由行動の後、解散。体を動かした満足と、幾ばくかの知識を刺激されたという満足が得られた楽しい懇親会であった。

なお、映像は80年前の山と人で、7月の土曜懇話会で映写される予定だという。

（西村智磨子）

タスマニア・トレッキング

1月27日から2月4日、タスマニア・トレッキングに参加した。この企画はコジオスコ登山に続くオーストラリアシリーズ第二弾。自然、歴史、登山に分けて報告する。

まず自然。ここは島の3分の1が世界自然遺産に指定されている自然の宝庫。クレイドル・マウンテン・セントクレア湖国立公園は、氷河に削られた岩盤上に形成された平原状の山岳地帯で、多数の氷河湖が散在している。

シンボルとなるクレイドル山は、1億7000万年前のジュラ期の粗粒玄武岩で構成されている。周囲は数万年前の姿を今に残す苔むした雨林に覆われていて、ゴンドワナ大陸以来の太古の植物パンダ

クレイドル山の登山口ダブ湖で記念撮影

ニやユーカリ、各種パインやブナ、ボタングラス、そして森林限界を越えれば草原の中に各種高山植物が咲き乱れる。山上に展開される大プラトーは日本の山では見ることのできない景観。そして野生の動物は多い。ルートを散策しているとワラビー、ウォンバット、ポッサム、ハリモグラなどによく遭遇する。

次に訪れたのはフレシネ半島国立公園。赤い花崗岩のロックガーデンの岩山から望むワイングラスベイはあいにくの雨模様のなかではあったが、息をのむ美しさであった。

最後に訪れたのはマウント・フィールド国立公園。大きなユーカリの原生林に覆われていて、倒れた巨木が苔むしたなかには大きな木性シダ類に囲まれた道が通じている。100メートルものユーカリの巨木が林立しているのには圧倒される。

次に歴史。この島は入植されて200年ほど。先住民アボリジニを僅か70年ほどで絶滅させてしまった。われわれの訪れたロンセストンやホバートは、イギリス以上にイギリス的と言われていて、ヴィクトリア様式、ジョージア様式のナショナルトラスト認定の歴史的建造物が数多く保存活用されている。1836年夏、この島をヒッツ・ロイ艦長のビーグル号で訪れたダーウインは、当時の島の様子を生き生きと伝えている。

最後に1545メートルのクレイドル山登山。プラトー上に聳える岩峰の登攀となる。ルートグレードはⅡ級ほど。最も難しい箇所でⅢ級ほど。柱状節理の岩塊のなかを登っていくわけだが、フリクションがよくきき、登攀はさして困難ではない。平均年齢64歳、30名の参加者のうち27名が登頂した。

（田中純夫）

科学委員会――フォーラム「登山を楽しくする科学」

2月28日、日本工業大学神田キャンパス（多目的ホール）において、科学委員会主催フォーラム「登山を楽しくする科学」が開催された。

200人近い申込み者が殺到し、会場が狭いため日本山岳会会員の方は、3月28日に再度ルームで行なうことにしてそちらにまわっていただいた。それでも委員は別にして100人を超える方々にご参加いただいた。お断りせざるを得なかった方々には申し訳なかったとしか言いようがない。来年からは会場の選択に意を用いる必要があることを痛感させられた。

米倉久邦委員の総合司会によって始まった。講演は6題。①「山で雷にあったら」芳野赳夫委員、②「ハチ・ヒル等の対策」北野忠彦委員、③「腹式呼吸」松浦祥次郎委員、④「快適な衣類」織方郁映委員、⑤「ストックで楽に登る」箕岡三穂委員、⑥「山の植物学」石井誠治委員であった。必ずしも全員がその道の専門家というわけではないのだが、よく調べてきて要領よくまとめてくださった。

また、会場からも多数の発言があり、討論会という性格にしたいという当初の目的を達することができた。できることであれば、講演抄録を順次『山』に掲載してほしいくらいである。

なかでも「避雷対策」は専門家の意見として、周知できることを期待したい。「ハチ・ヒル等対策」では、ダニが媒介する病気があること、ハチは相手を刺激しないこと、ヒルには塩水スプレーが有効など実際的な知識が披露された。「腹式呼吸」の演者は、ヒマラヤの5000メートル級のトレッキングで動脈の酸素飽和濃度がほとんど毎日90パーセントを超える効果があったと語った。「快適な衣類」では、速乾性素材、ゴアテックスの有効性とその理論が示された。「ストックで楽に登る」では、歩行に関与する筋の話、筋収縮の理論、なぜストックを使うと安全にかつ楽に登れるかという話題が提供された。

最後に石井氏がハイマツとカラマツの話をされて会場は盛り上がった。委員は立ちっぱなしでご苦労であったが、フォーラムは大盛会であった。

（箕岡三穂）

「支部だより」

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとリポートします。

栃木・茨城・千葉支部

第2回三支部合同懇談会

首都圏三支部の第2回懇談会が、2月7～8日に千葉県南房総市で開催された。2007年、ほぼ同時期に設立された栃木・茨城・千葉三支部が懇親を深め連携して支部活動を推進しようとの趣旨で、第1回懇談会は昨年2月、栃木県日光湯元で開催された。

今年の会場は海水浴場で有名な岩井海岸に接し、背後に千葉の名山富山（とみさん）を望む民宿治郎吉である。栃木支部11名、茨城支部8名、千葉支部28名、そして本部より神崎忠男副会長の計48名と多くの参加者を得ることができた。

16時より懇談会を開催。神崎副会長より山岳会の現況、そして首都圏の支部に対する期待が述べられた。次に各支部より設立後今までの活動状況について報告があった。18時よりの懇親会は、伊勢エビ、アワビ、新鮮な魚貝の舟盛りで海辺の宿の料理を楽しみながら支部同士の新しい出会いの場として盛りあがった。

翌8日は、富山、鋸山登山、鋸山ロープウェイでの散策コースと3パーティに分かれ房総の山歩きを楽しんだ。これをきっかけに各支部の連携をさらに深め共同事業も推進していきたいと考えている。次回担当は茨城支部にお願いして再会を約束した。

（千葉支部　篠崎　仁）

三支部の支部員が登った。富山山頂で

福岡支部

「岳人のつどい」開催

福岡支部では、これまで会員を対象に「新年のつどい」を行なっていたが、今回、日本山岳会の枠を外し、地域の登山関係団体や一般の登山愛好家にも呼びかけ、「岳人のつどい」として講演会と懇親会を1月17日に開催した。講演会参加者は95名（会員46名、一般49名）、懇親会参加者は52名（会員38名、一般14名）であった。

講演者には石川富康氏をお迎えし、「美しき7つの峰」をテーマにお話しいただいた。氏は世界最高齢の七大陸最高峰登頂者で、愛知県山岳連盟会長でもある。講演は多くのスライドを駆使しながら行なわれ、なぜ七大陸の最高峰を目指したのか、その登山中の体験談などが語られた。

氏は50歳を過ぎて8000メートル峰を意識しはじめたという。チョ・オユーを皮切りに、4座をたて続けに登られている。エベレスト登頂は1994年、57歳の時であった。当時、日本人最高齢での登頂であった。その頃は、8000メートル14座すべての登頂を目指していたという。だが2002年、65歳で2度目のチョモランマへの挑戦で、高所登山を続ける自信を失ってしまった。その後、次の目標を七大陸最高峰の登頂に切り替えたということである。

美しい山々のスライドと登頂体験談は、氏の山への熱い思いも加わり臨場感あふれるものであった。65歳で新たな目標を掲げ、七大陸の最高峰を目指して登りはじめ、

「美しき7つの峰」をテーマに話された石川氏

70歳を過ぎて成し遂げられた。登頂の成功は氏の優れた気力・体力もさることながら、何よりも強い意思の賜物であろう。このことに会場の中高年登山者の方々は、大いに力づけられ、刺激を受けたことと思う。

また、酸素使用に対する考え方、入山料のことなど、これから高所登山や海外登山を計画する人に役にたつ有意義な講演会になった。

懇親会は、会場を近くの平和楼に移して行なわれた。支部長挨拶のあと、福岡県山岳連盟会長・足達敏則氏の乾杯の音頭で宴がはじまった。会食の合間には、最初のエベレスト登山で一緒だった愛知学院大学隊の仲間から花束の贈呈や、東九州支部及び北九州支部から参加された会員の紹介や活動報告などもあった。

また、福岡山の会、九州大学山岳会、福岡大学山岳会、九州登山情報センター、山のトイレ・環境を考える福岡県協議会など、参加された団体の会員から挨拶をいただいた。

懇親会は、和やかな雰囲気で進み、深田顧問の博多弁を交えた締めくくりで大いに盛り上がり、盛会裏に終了した。

（酒匂輝昌）

短歌

スキー懇親会

戸村健児

ゴンドラの頂上駅から麓まで去年（こぞ）より遠く初スキーする

瘤こぶと雪を積みたる馬の背を横滑りして転び落ちたり

チョモランマ登頂成しし岳人も抜重加重しスキー習へり

燕岳守る主（あるじ）の吹くホルン雪降る夜に耳近く聞く

大正の厳冬期登山を今に継ぐ赤沼健至の秘蔵映像

平成21年度「海外登山基金助成登山計画（秋冬季分）」募集

日本山岳会海外登山基金審査委員会

日本山岳会は登山界の活性化を目指して優れた海外登山計画に対して「海外登山基金」による助成を行なっています。

第21回目となる平成21年度は、年２回に分けて、今回は秋冬季分の募集を行ないます。困難を求めての挑戦、発想の新しさ、夢多い計画などユニークな登山計画を支援したい、と考えています。

登山には多様なスタイルと発想があるはずです。ピークを目指すだけの登山ではなく、新しい課題に挑戦していく意欲も大切なことでしょう。パイオニア精神にあふれるさまざまなジャンルの計画であれば歓迎したい、と考えます。会員資格や単独、パーティなどの条件は問いません。奮ってご応募ください。

記

- 対象　平成21年８月１日～平成22年１月末に海外の山へ出発する登山隊
- 申込方法　所定の様式（事務局にご請求ください）に記入し、登山計画書（15通）を添えて申請してください。
- 申込締切　平成21年６月15日
- 審査と助成期間　平成21年６月中に審査、７月の理事会で決定、助成。なお、対象となった登山隊は後日、登山報告書の提出を必ずお願いします。ＪＡＣ会報『山』に掲載します。
- 20年度助成対象登山隊（総額120万円）

１）GIRIGIRI BOYS ロールワリン登山隊2009
カン・クルー東壁6320㍍（未踏）、クワンデ北壁6187㍍
期間＝2009年11月上旬～12月下旬

２）JAPAN Gaurisankar 7134㍍ EXP2009
ガウリシャンカール東壁7134㍍（未踏）
期間＝2009年10月～11月

３）信州大学60周年記念事業ペリヒマール登山隊
①ヒムジュン7092㍍～ヒムルンヒマール7126㍍縦走
②ネムジュン7139㍍北西壁（未踏）
期間＝2009年９月上旬～11月中旬

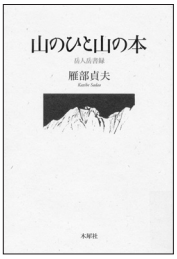
４）team WASABI カヒルトナ・デナリ登山隊
カヒルトナピーク～カシンリッジ～デナリ
期間＝2009年４月下旬～６月上旬

- 問合・申込先　日本山岳会事務局　電話03－3261－4433

図書紹介

『山のひと山の本――岳人岳書録』

雁部貞夫・著



2008年12月
木犀社刊
四六変型判　286ページ
定価　2625円

1990年から2年間にわたり雑誌『岳人』に連載された「岳人岳書録」を集成した、雁部貞夫氏による山の本をめぐるエッセイ集。「山」と「本」と「酒」とを愛した上田哲農、安川茂雄の両氏に捧げられ、上田画伯の山の絵が表紙の装画になっている。

日本の山岳界に名を連ねる74名の先人たちとその著作を取り上げ、人名別・五十音順に紹介しているが、山岳書についての「辞書」を意図したものではなく、意の赴くままに記したエッセイとして読んでほしいと、著者自ら断っている。「山の魅力にとらわれた人は、ただ登るだけで満足せず、山の本を愛読する」という深田久弥の言葉を引いて、山と山の本との不可分な関係を改めて確認することから始まり、「筆者の好みと関心の度合い」により選ばれた人と作品を相手に、味わい豊かな読書談義が繰り広げられて、読者を山岳書の世界にいざなう。

日本の山岳文化を培ってきたそれらの著者たちと筆者とが共に取り交わす「自由な即興演奏」の趣きを楽しむことが本書の魅力だが、そうした興趣にみちた対話が展開されるなかで、「山岳界の常識や先行書の見解と意見を異にする点」が多く含まれていることは興味深い。

その例として「浦松佐美太郎」の項目があげられるが、浦松の文章に潜む「ひよわさ」についての評価に対して、筆者は、「それとは逆に、彼の文章は強い神経と、よく抑制の効いたおとなの文章というべき」として、異なった見解を提示する。ここには、表現上のメディアとしての文章と、第二次世界大戦勃発という、その表現を成立させる場としての同時代的状況世界とのかかわりにまで及ぶ議論を予感させる内容が含まれているだろう。

本書の短い叙述の範囲ではそこまで説き進んでいないとはいえ、そうした予感を感じさせるだけでも、読者にとっては、文章を読みながらみずからも談論に参加するという、読書のダイナミズムを充分に味あわせてもらえるものだ。

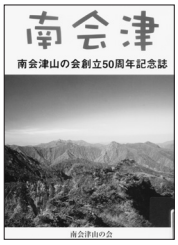
しかも、そのような、筆者なりの主観を反映する部分であっても、同時にそこでは、しっかりと「日本の山岳界の歴史の流れ」が意識されており、かつ筆者の山に関する該博な知識と深い実践経験があって、それに裏打ちされていることを見逃してはならない。

「あとがき」の最後に、筆者は、上記両氏に対する献辞を記しつつ「かつての談論風発した宵々が限りなく懐かしい」と結んでいるが、まさに本書自体が、そのような談論のさまを演じだそうとするものにほかなるまい。それは、本書に登場する著者の多くが筆者とは直接交流する機会をもった人たちであることを思えば、筆者の心の中では、その場となった日本山岳会のルームでの交歓の情景と重なり合うものであるに相違なく、そこに、山岳会に対する深い想いを読みとることもできるはずだろう。

（飯田年穂）

『南会津――南会津山の会創立50周年記念誌』

山田哲郎、他・編



2008年10月
南会津山の会発行
A５判　143ページ
頒価　1500円

創立50周年を迎えたのを機に南会津山の会が発行した記念誌。この山の会には『いろりばた』という会報があって滋味ある内容で知られていたが、こちらは休刊中で現在は会員通信のみ発行だという。したがって正式の会報の発行は久しぶりのことである。

会の創設は昭和33（1958）

年、一地方に誕生した山の会であるが、まことに永い歩みを続けてきたものである。

南会津山の会といえば、その風土と一体となって醸す独特の山の雰囲気であろう。「囲炉裏、ランプ、山の湯、民話、熊狩り、峠、湿原、岩清水、木地師、鉈目、やぶこぎ等々」どの一つをとっても山を愛する人達の素朴な心を温めてくれる言葉だ。南会津の山々にはその背景や素材が豊かである。都会の人士をはじめ多くの人々を魅了する所以でもある。

本誌は創立50周年の記念誌であるが、回顧的な部分は最小限に留め、久しぶりに会員の新鮮な文章や写真で南会津の山々の香りを伝えてくれたのはうれしい。

本誌刊行を目前に逝去された川崎精雄氏についての企画は時機を得たよい企画だったと思う。古い話をもう少し聞き出しておくべきだったかもしれない。南会津の山々の先人であっただけに惜しまれる。

時の流れとともに南会津を取り巻く環境の変化は著しい。しかしそこに共通の心のふるさとを求める人達を失うことはないだろう。囲炉裏に大きなほた木を継ぎ足し山談義を続けようではないか。

（松家　晋）

『The Himalayan Journal 2008 (Vol.64)』

Harish Kapadia・編

2008年
The Himalayan Club
発行
A５変形判　306㌻

創立80年を迎えた「The Himalayan Club」の機関誌である。ヒマラヤ高峰登山情報誌だった本誌は、07年号からヒマラヤ文化・科学誌にリニューアルした。08年号も約3分の2はヒマラヤ登山史を含む文化と科学関係に費やしている。今日のインド・ヒマラヤ登山は以前に比べて高所登山や探検的な意義が薄れてきたことは事実だろう。

冒頭にヒマラヤン・クラブ創立80年祝賀会の様子を記している。会長挨拶のなかで、インド人クライマーの実力養成を働きかけ、インド人だけでヒマラヤやアルプスの難峰に登頂できる日の近いことを期待しているという。また、ネパールや中国でも海外からの登山者に複雑な手続きもなく登山を許可している昨今、インドの入国と登山許可取得が煩雑な上に、許可取得に時間がかかり過ぎている。この手続きを簡素化してほしいと述べている。

本編は創立80年記念祝賀会での講演録、『The Early Years』と『Travels in the Lesser Himalaya』の2点を転載したヒマラヤ登山の回想から始まる。続いてThe Himalayan Club at Eightyとして、80年史をまとめている。ほかにヒラリー卿の思い出、ソロ・クーンブ地方の低地出身ポーターの問題点、高所領域のパイオニア、英国山岳会の150年、そしてマモストン・カンリ登頂や遠隔地のトレッキングの報告など18点あるが、なかでもTravels in the World of F. Kingdon-Wardが目を引く。

遠征欄では10点のなかに「ヤル・ツァンポ源流の山」、「チベット側の紅旗峰」、「アタ氷河踏査」、「マアン初登頂」と4点の邦人による最新情報が際立つ。

書評は1954年、K2に初登頂したイタリア隊々員間の醜聞極まりない噂を、50年間の沈黙を破って成文化した〝K2—The Price Of Conquest〟、エベレスト公募隊の実態を暴いた〝Dark Summit〟など14点。

フィルムでは印パ紛争で汚れた氷河〝Siachen〟とヒマラヤ・クラブの80年を語る〝Eighty Years On Top〟の2点を紹介している。そしてヒラリー卿追悼へと続く。

（南井英弘）

会務報告

平成20年度第10回（2月度）理事会

日時　平成21年2月12日　18時30分～21時

場所　日本山岳会集会室

【出席者】宮下会長、神崎副会長、宮崎・吉永・成川各常務理事、斎藤・藤井・石橋・古野・太田・堀井・相馬・山川・岡部各理事、深川・竹中各監事、河野・近藤各常任評議員、神長会報編集委員長

【委任】鯵坂副会長

【欠席】日下田常任評議員

【審議事項】

1・平成20年度海外登山基金審査報告（古野）

1月28日、海外登山基金審査会が開催され、今季応募の6隊のうち以下の4隊を助成対象として推薦する。なお助成金は各隊30万円、総額120万円とする。

①GIRIGIRI BOYSロールワリン登山隊2009

②JAPAN Gaurisankar 7134メートルEXP・2009

③信州大学60周年記念事業ペリヒマール登山隊

④team WASABIカヒルトナ・デナリ登山隊

また、来年度は海外登山基金審査を年2回に分けて行ないたい。（承認）

2・「高尾の森づくりの会」活動について順守・改善指示（宮崎）

山岳会の運営管理に支障のある箇所の順守・改善を文書で指示する。（承認）

総会には出席しましょう。　欠席者は必ず委任状の提出を！

【報告事項】

1・支部事務局担当者会議報告（神崎）

2月7日～8日開催され、支部から主として平成21年度の支部事業計画・予算の説明を、本部から法人改革進捗状況、支部助成金の取り扱い等について説明・報告が行なわれた。

2・公益法人制度と日本山岳会の検討課題（吉永）

公益法人化プロジェクトチーム（委員長　竹内哲夫）作成の報告書「公益法人制度と日本山岳会の検討課題」をふまえ、現状報告と今後の対応について説明が行なわれた。

3・（社）東京都山岳連盟創立60周年記念式典・祝賀会の案内（宮崎）

3月7日開催の案内が届いた。宮下会長と神崎副会長が出席する。

4・法人改革合同会議について（宮崎）

日本山岳会の法人改革に向けた二つのチーム「公益法人化プロジェクトチーム」と「定款検討委員会」の合同会議が1月23日に開催された。

5・シンポジウム「登山道の安全を考える」（宮崎）

信州大学山岳科学総合研究所（松本市）から開催（2月21日）の案内があった。

6・2008「植村直己冒険賞」受賞者の発表について（古野）

今年度の受賞者は2月12日に発表される予定であったが、受賞（候補）者が辞退している模様。

7・（財）自然公園財団評議員選出に係る平成20年度第2回理事会（書面審議）の結果について（宮崎）

宮下会長が再選された。3月17日に評議員会開催の案内があった。

8・フォーラム「登山を楽しむための科学」（山川）

科学委員会主催で2月28日に日本工業大学神田キャンパスで開催する。

9・「ツール・ド・TANIGAWA―谷川連峰トレールランニング」の件（山川）

同イベントは群馬県みなかみ町観光まちづくり協会（後援群馬県、新潟県など）が6月27・28日に計画、開催するもの。2月6日の山岳団体自然環境連絡会において問題提起があり、自然環境、登山者への安全等の影響大きく、実施見

送りの要請をすべきとの意見で一致。

10・会計検査院からの資料要求について（吉永）

参議院から会計検査院、文部科学省経由で特例民法法人の役員・財務に関する資料要求があった。近日中に回答予定。

11・年次晩餐会会計報告（吉永）

出席者総数462名、収入663万円（442名分）、支出666万3399円（3万3399円の赤字）。

12・会報『山』2月号編集報告（神長）

ルーム日誌 2月

2日　総務委員会
3日　図書委員会　図書管理委員会　アルパインスケッチクラブ
4日　常務理事会　集会委員会　山岳地理クラブ
5日　総務委員会　アルパインフォトビデオクラブ　101の会
6日　自然保護委員会　海外委員会
7日　支部事務局担当者会議
9日　高尾の森づくりの会　アルパインスケッチクラブ　アルパインスキークラブ
10日　指導委員会　九五会
12日　理事会　山の自然学研究会
13日　海外委員会　会報委員会　01会
16日　総務委員会　資料映像委員会
17日　自然保護委員会　山岳研究所運営委員会　00会　アルパインスキークラブ
18日　山岳地理クラブ　三水会
19日　山想倶楽部　つくも会
20日　科学委員会
21日　学生部　緑爽会
23日　101の会　総務委員会
24日　インターネット小委員会　自然保護委員会　千葉支部　アルパインフォトビデオクラブ
25日　自然保護委員会　麗山会　ゆきわり会
26日　理事会　海外委員会　山遊会

2月来室者592名

■会員異動（2月）

物故

鳥居鉄也（4449）08・10・16
田中幸男（6386）09・1・16
吉田　宏（8026）09・2・27
中山茂樹（9795）07・11・20
山本　晃（10003）09・1・24
福田　光（10449）09・1・21
志田正美（10127）09・2・15
小宮京子（11667）07・10・20
藤井正子（13045）08・9・2

退会

神谷凡夫（6120）
中西　章（7891）
松野　豊（8738）
楠田トシ子（9449）
児島実照（9691）宮崎支部
佐藤庄三（10401）関西支部
芦田裕之（12784）関西支部
神子安雄（12820）
高橋　勇（13589）

図書受入報告（2009年2月）

著者	書名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈／購入別
敷島悦朗	丹沢・奥多摩・奥秩父――徹底ガイド 春夏秋冬	159p／21cm	東京新聞出版局	2009	出版社寄贈
岡部紀正	高木文一 初登攀の軌跡――われ、谷川岳にアルピニズムの濫觴を見ゆ	181p／20cm	新ハイキング社	2009	著者寄贈
白尾元理・小畔尚・斉藤靖二	新版　日本列島の20憶年――景観50選	101p／21cm	岩波書店	2009	出版社寄贈
深沢健三（編）	甲斐山岳　第1号――山梨支部設立60周年記念誌	104p／21cm	ＪＡＣ山梨支部	2009	発行者寄贈
本望英紀	越後における飯豊山信仰／越後赤塚中原藤蔵氏の飯豊山登山	41p／21cm	本望英紀（私家版）	2009	著者寄贈
ＪＡＣ東海支部（編）	シャルミリ峰登頂――東海支部第9次インドヒマラヤ学術登山隊2007	82p／30cm	ＪＡＣ東海支部	2009	発行者寄贈
尾形好雄（編）	千人の悪魔の峰――Indo-Japanese Joint Karakorum Exp.	91p／26cm	日本ヒマラヤ協会	1985	購入
山森欣一（編）	烈風の彼方へ――佐久間隆　遺稿・追悼集	117p／21cm	日本ヒマラヤ協会	1983	購入
山森欣一（編）	天壇の山に挑む――ミニヤ・コンカ東面	128p／26cm	日本ヒマラヤ協会	1992	購入
大野廣美（編）	ヒマラヤ、そして仲間達へ!!――HAJ登山学校1980年の記録	88p／26cm	日本ヒマラヤ協会	1982	購入
尾形好雄（編）	知られざる北部シッキムの山々	82p／26cm	日本ヒマラヤ協会	1993	購入
Panday, Ram Kumar	Yeti Mystery――Mystery of Snowman	94p／22cm	Ratna Pustak Bhandar	2007	著者寄贈
Mandir, Kala	Melting Mountains, Wilting Glaciers & The Quest for Shiva's Trident	27p／26cm	The Himalayan Club	2008	M.H.Mehta氏寄贈

INFORMATION インフォメーション

◆平成21年度　上高地山研の開所案内　山研運営委員会

本年度の開所期間は4月27日(月)から11月6日(金)を予定しています。ゴールデンウィークの宿泊予約は、FAXまたはハガキで事務局まで申し込んでください。

本年度は、皆さまがさらに安心かつ快適にしてご利用いただけるよう、AED（自動体外式除細動器）の導入をはじめ設備の拡充を予定しています。

今年も山研をご利用ください。

◆2009秋田自然保護全国集会　自然保護委員会

秋田支部との共催で開催します。

日程　6月20日(土)～21日(日)

場所　秋田市「秋田温泉プラザ」（前夜泊も可）

日程

■20日　集会（支部報告、パネルディスカッション「東北六支部からの報告と討議」、懇親会）

■21日　フィールドスタディ（太平山登山、自然観察）

費用　①19～21日（2泊）2万4000円　②20～21日（1泊）1万5000円

申込　5月10日までに、①～②の区分を明記し川越尚子宛〒185-0011国分寺市本多3-7-31 FAX 042-321-6059 ✉kawagoejac@mti.biglobe.ne.jp）

＊申込者に詳細を送ります

＊「支援バスツアー」も実施します

問合　近藤緑（TEL&FAX 03-3395-0326 ✉hachi-kondo@nifty.com）

◆第四期私たち県民の森林（もり）づくり　岐阜支部

平成18年度より岐阜県と協働で「県民による森林づくり運動」を展開しています。4回目となる「山の日イベント」を、暑さを避けて5月に行なうことになりました。一般参加者を含め奮って参加下さい。

日時　5月16日(土)雨天順延（17日）7時30分より

行事　県有林での植林・森の観察会、希望者は小津権現への登山など

集合　岐阜県揖斐川町藤橋　道の駅「星のふるさと藤橋」（国道303号線）

＊JRなどでの参加者は事前に連絡いただけば送迎します（JR岐阜または大垣駅）

解散　道の駅　16時頃

費用　傷害保険料300円

問合　藤井法道（TEL 090-5454-7069 ✉qqa467u9k@tiara.ocn.ne.jp）

◆地球の脈動を感じるアイスランド11日の旅　山の自然学研究会

プレートとプレートの裂け目を見られるアイスランドへの旅です。ユーラスツアーズ（第49号登録）による、現地ネイチャーガイド付き。

期日　7月5日(日)～15日(水)

定員　20名

費用　48万5000円（航空割増燃料代別）

申込・問合は船橋まで（FAX 046-7-32-3011 ✉akira@funabashi.to）

◆倉岡裕之「世界の高峰ガイド登山」報告会

『山岳』の発行日　9月に繰り上げへ

山岳編集員会

機関誌『山岳』の発行日を従来の12月から9月に早めます。登山や会務の報告を、最も適切なタイミングでお届けするためです。このため第百四年（2009年）の原稿締め切りは6月末日となります。出稿をお考えの方は、内容などを早めに編集委員会に連絡してください。原則として、ワープロでの出稿をお願いします。

東京都写真美術館

東京都目黒区三田一丁目13番３号（恵比寿ガーデンプレイス内）
TEL 03-3280-0099
URL：http：//www.syabi.com

MOUNTAIN MUSEUM

山の博物館訪問

観覧料　展覧会によって異なる
開館時間　10：00～18：00（木・金は20：00まで、入館は閉館の30分前）
休館日　毎週月曜日（休館日が祝祭日の場合はその翌日）、年末年始
交通機関　JR恵比寿駅東口より徒歩約７分、東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩約10分

――写真と映像の専門美術館としてセンター的役割を担う美術館をめざしています――

東京都写真美術館は、わが国初めての写真と映像に関する総合的な美術館として、平成７（1995）年１月に恵比寿ガーデンプレイス内に総合開館しました。日本における写真・映像文化の充実と発展を目的として、関係各方面の熱い期待に応えて、平成２（1990）年６月の第一次開館を経て誕生したものです。

平成17（2005）年には開館10周年を迎え、ミッション「存在感のある美術館運営」を定めました。写真を愛好する方々のみならず、幅広い方々が来館され、当館の存在を知っていただくとともに、日本を代表する写真・映像のセンター的役割を果たし、新たな創造活動の場となることを目指しています。

そのため当館では、優れた作品の収集と管理、質の高い展覧会企画、社会的な広がりを実現する教育普及事業、美術館活動の基礎となる調査研究、貴重な資料を保管し閲覧に供する図書室運営など、各種の事業を多くの方々にご支援をいただきながら展開しています。平成21年度も年間20本を超える展覧会や、展覧会に付随した講演会、ワークショップなど多彩な事業を予定し、親しまれる美術館として活動してゆきます。ミュージアムショップやカフェも充実しており、展覧会ご鑑賞のあとの憩いのひとときを過ごせる空間も多くのお客さまからご好評いただいています。

社会状況は時々刻々と変化していきますが、文化・芸術活動に寄せられる期待は、時代の変遷を経ても変わることはありません。今後とも、美術館の根本的な使命である、文化の蓄積・継承を通じた社会発展への貢献を果たすために、努力を積み重ねてまいります。

世界の高峰で日本人最多のガイド経験をもつ国際山岳ガイドの倉岡氏による高峰登山の報告会です。
日時　3月24日㈫19時～
場所　東京・代々木の「ミウラドルフィンズ」（TEL 03-3403-2061）
内容　昨年の高峰ガイド登山と今後の予定をスライドショーで報告。
費用　無料
問合・申込　ウェックトレック
（TEL 03-3437-8848
FAX 03-3437-8849
✉ info@everest.co.jp）

平成21年 集会委員会 山行実施計画及び募集人員

実施時期	実　施　内　容	募集人数
６月10日～14日	第４回　熊野古道（奥駈け前半）	20人
７月14日	土曜懇話会（ルーム104号室）	
７月15日～16日	籠ノ塔・水の塔山行	17人
８月17日～26日	海外（ドロミテ山群）	15人
10月17日～18日	那須岳・三斗小屋	15人
10月24日～25日	山研宿泊　紅葉散策	20人
12月６日	晩餐会記念山行	
１月15日～17日	スキー＆スノーシュー懇親会	30人
１月20日～27日	海外（ミャンマー・ヴィクトリア山）	30人
３月15日～18日	八ヶ岳（赤岳鉱泉ベース）	15人

● 集会委員会では、21年度　10回の山行を計画しております。
● 各山行の詳細に関しましては、実施時期の２カ月前に『山』に掲載します。
会員の多数の参加をお持ちします。

■訂正とお詫び

２月（765）号、16ページ２段５行（堀、成川）は（堀井、成川）の誤りでした。訂正してお詫びします。

❖編集後記❖

● 平成20年度の第２回通常総会が、３月14日に開催、その模様を掲載しました。総会の成立は、現定款では３分の１の出席で成立しますが、新しい法人制度では２分の１になります。より多くの会員の総意を反映させるためにも、出席できない方や遠方の方は、ぜひ委任状を提出してください。今回の総会でも、山岳会にとって貴重な財産である図書室のさらなる充実を望む意見がなどが発表されました。会員のための山岳会であり、総会でありたいと思います。（神長幹雄）

日本山岳会会報　山　766号

2009年（平成21年）３月20日発行
発行所　社団法人日本山岳会
〒102－0081
東京都千代田区四番町5－4
サンビューハイツ四番町
TEL　東京(03)3261－4433
FAX　東京(03)3261－4441
発行者　日本山岳会会長　宮下秀樹
編集人　神長幹雄
E-メール:jac-kaiho@jac.or.jp
印　刷　株式会社　双陽社